一振りの剣

森下 加夜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一振りの剣

【Ｎコード】
Ｎ２０１３Ｆ

【作者名】
森下　加夜子

【あらすじ】
私はまだ、懐かしいあの土地で私を待つものを知らない。私を呼ぶものを知らない。それでも……

旧時の地

先ほどまでは霞がかかった遠い記憶。
電車の最後尾で眺めていた遠ざかってゆく風景と、軌跡を伸ばすレール。
ついさっきまでは別れが辛くて泣いていたはずなのに、遠ざかっていう景色にはそれ以上の感情が湧かなくて。
ああ、私は家に帰るのだと、やっと納まるのだと、すっかり安心して一つめのトンネルを抜ける頃には眠ってしまっていたらしい。
次に目が覚めた時は恋し焦がれた私の部屋だった。

そして今、私は再び彼の土地を踏んでいる。
記憶の中の霞がだんだんと晴れて、あまりにも昔と変わらない風景がそこにはあった。
広い空、遠く並ぶ山々、広がる緑、むき出しの土が示す道、聞き覚えのない蝉の声。ビルが林立する地元とはあまりに違う、田舎な風景に幾ばくかの不安がよぎった。
親類に命じられ、両親に言われるがままに来たのは良いけれど、この夏、私はここでやって行けるのだろうか。

001 ： 再会

暫く立ち尽くしていると、肌が熱をもってきたのに気が付いた。じりじり肌を焦がす日差しの存在を思い出して、あわてて日傘を広げた。

迎えが来ると聞いていたのに、ずいぶん遠くまで視界は開けているのに、人影は見当たらなかった。

時間を確かめるために携帯を取り出す、時計機能は問題なかったけれど、圏外だった。

「山中だもんね、仕方ないか」

一人ごちて、暇つぶしにとゲームを起動させた。パズルゲームくらいなら通信しなくたってできる。

熱中していてあたりが見えなくなっていたのだと思う。

後ろから影が伸びていたのも、日傘のせいで気がつかなかったのだと思う。

「おい、莢（さや）。何時まで俺んこと無視しとるんや？」

突然背後からかけられた声に驚いて、思わず逃げて声の主から間をとる。

「なんやその態度。いくら俺でも傷つくぞ」

困ったように頭を掻く、体つきの出来た男の子が目の前にいた。

「前ん時は帰りとーない言うて泣いて喚いてたんはお前やろ」

そうだった。携帯出すまではそのことを思い出してた。ということはつまり彼は、いやアイツは……。

「久々に再会したおもうたらこれかい。都会はそないに冷たいとこやねんなぁ！？」

「何を言うか！この馬鹿ケン！」

勢いに任せて叫んだ私を、奴はニヤニヤしながら見下ろす。ああムカツク！

「おう、その調子や。お前背ぇ伸びんかったんやな？」
「あんたが馬鹿みたいに伸びすぎなのよ、ばーか！」
関西訛りのあるこいつは私の遠縁にあたる御剣健司（みつるぎけんじ）、前にここにきたときは毎日いっしょに遊んだ。そのころの面影は残っているけど、すぐに気が付かないくらいには成長したようだ。
「まー、お前はちびでもそこそこ可愛く育ったからええやんか」
「なっ……！」
よくもまあそんなことを恥ずかしげもなくいえますねこいつは！褒められ慣れてないから返事ができないよ！
一人戸惑って固まる私をよそにケンは私の荷物をひったくって歩き出した。慌てて早足で追いかける。
「む、迎えはケンだけなの？」
「ああ。今こっちにおるんは俺と婆ちゃんとおっちゃんだけやねん」
「叔父さんって、健文（たけふみ）叔父さん？」
「そうそう。それに、だいたい日中は仕事とか買出しでおらへん」
「なるほどねー。寂しくなっちゃったんだ」
記憶に残るここでの暮らしは、それはそれは賑やかだった。広い家に私の家族と、ケンの家族と、もともとすんでたお婆ちゃんとその家族、それに加えてしょっちゅう親戚が訪れてきていたのに。
「お前が来てた年が特別だったんだよ」
「そうなの？」
「そや。ほかの年は毎年こんな感じや」
「へぇ～、じゃあケンちゃんは毎年こっち来てるんだ」
「ああ、修行でな」
「修行？何それ！」
ケンが漫画見たいなことを真面目に言うものだから、大笑いしてしまった。
「言うとくけど、冗談ちゃうからな」
今さっきまで笑ってた私とは反対に、ケンはやっぱり大真面目で、それからちょっと悲しそうに見えた。

「詳しい話は婆ちゃんがしてくれるから」
「ちょっと待って！」
話を中断して欲しいだけだったのにケンは立ち止まったから、私が数歩前に出て、向かい合う形になった。
「なんや？」
「私も、その修行に関係あるの！？」
ケンは視線を斜め下にそらした。図星のようだ。それに、何か言い辛そう。
「せや。そうでないとわざわざこんな所に呼んだりせえへん」
「私はケンに呼ばれてここに行かされたの？」
「詳しい話は婆ちゃんがするさかい」
視線を合わせてくれないまま、ケンは歩き出した。私を追い抜かす時に小さい声でごめんと言ったのが聞こえた気がする。
「ケン？」
背中は遠ざかって行くばかり。
「はよしい。置いてくで」
声はかけてくれても決して振り向きはしなかった。
「……わかったわよ」
どれだけ目をこらしても、まだ懐かしい家は見えない。
このあとの長い道のりはずっと気まずいまま、二人とも無言で、長い道を、とても長い時間をかけて歩いた気分だ。
そのせいだろうが、着いたころには、荷物を持って貰ってたのにも関わらず私はとてもくたびれていた。

００２　：　懐かしの家

やっと見えた懐かしいく大きい民家の前には私のお祖母ちゃんの姉にあたる春子お祖母ちゃんが迎えに出てくれていた。
「さやちゃん？えらいべっぴんさんなったねぇ。こんな遠いとこまで来て、くたびれたやろう」
　十年ぶりの春子お婆ちゃんはとても小さかった。
「はい、疲れました」
「せやろ。健司、さやちゃんを部屋まで案内したげなさい。婆ちゃんは夕飯作ってまっとるさかいに」
　ケンはちょっと不満そうにして見せたが、お婆ちゃんが首を小さく傾げたらすぐにやめた。満足げに笑った後すぐにお婆ちゃんは去って行った。
「おい莢、行くぞ」
「ちょっと……待ってよ！」
　ケンはサッと靴を脱いで歩き出したけれど、私は慌ててしまってもたついた。なんとか見失う前に追い付けたから良いけれど、全く思いやりのないやつだ。
　軋む階段を二階分上ってついたのは屋根裏部屋だった。天井こそ低めだが私にはまだ足りるし、その分広さは十二分だ。
「お前、ここ好きやったやろ」
「覚えていてくれたの？」
「和也兄さんに譲ってくれ言うて泣きわめいたなんかなかなか忘れられんわ」
　そうだった。十年前には先客がいて、入り浸らせて貰ってたけど、寝食までは許されなくってだだをこねて困らせたんだった。
「かずにいちゃん元気？」
「ああ。今は俺んち住んでる。大学院生」
「へぇ～なんか良いな。ケンの家、大家族で」

「……そうか」
沈黙がやたらと気にかかる。家族が多いと揉め事も多かったりするのだろうか。
「じゃあまた飯ん時間なったら呼びにくるから、荷物の整理しとき」
「ん、わかった」
改めて部屋を見させてもらう。天井が低いせいなのか、家が古いせいなのか。机はなくてちゃぶ台と座布団、ベッドはなくて、奥の押し入れに林間学校の時に使ったような布団一式が入っていた。「変わらないなぁ」
部屋の様子は変わらないはずなのに、以前のような魅力を感じないのは私が大きくなったせいで、屋根裏が手狭になったからだろうか。でも、それでも、嬉しかった。
荷物は旅行に行くよりは多めだけれど、それでもわざわざ整理するほどではなかったので、また荷物を開ける時にやろうと思う。すっかり自由時間気分でお布団や座布団を並べてごろごろしてるうちに、扉を下からノックする音が聞こえた。
「はぁい」
もう夕飯？まだ五時にもなっていないけれど、田舎は早いのかな？
上にに開く蓋のような扉を開ければ殆ど梯子のような階段の上に、年かさのいった男性がいた。
「健文おじさん？」
「おぅ、よう覚えとったな。ちょっと上がってええか」
「どうぞ」
言って、少し下がるとおじさんは扉の縁に腰かけた。
「お行儀悪いなぁ」
「莢は真面目やなあ」
何が面白いのか、おじさんは笑った。
「昔そう言って怒ってたのおじさんじゃなかったっけ？」
「せやな、でも莢も大きなりよったしもう言わんわ。自分でわかるやろ？」

「うん。もう高校生だよ」
「煙草吸うても構わんか？」
「いいよ」
胸ポケットからパッケージを出して、火をつけるまでの動作は時間を感じさせないくらいなめらかだった。
白く長い息を吐き出してからおじさんは顔をすこし歪めた。
「そうか、莢ももうそんなんなるんか」
「うん」
「そらぁおじさんも焼きが回るわな」
私はどう返事をすべきか迷っているうちにおじさんはまた煙草をくわえた。
暫くの沈黙の後、煙草のパッケージが入ってたポケットから携帯灰皿を出して広げた口に吸いかけをとんとんと叩いて灰が落とされる。
「莢はまだ春婆さんから何も聞いとらんのやったな？」
「うん。聞きに行った方がいいの？」
「いや、いらん。婆さんにもなりの考えがあるんやろから崩したらいかん」
「そう。おじさんも何が知ってるの？」
返事より先に口からは煙が吹き出て、煙草は灰皿の中でもみくちゃになった。
「一応な。いきなり呼び出されて戸惑っとるとは思うが、莢は硬くなったり、不安にならんでええ」
「そんな、無茶よ」
「まあ、買い出しなんかに出るんはだいたい俺やさかい欲しいもんがあったら言うてくれ」
「……わかった」
「じゃあまた飯時にな」
「うん」
階段を年の割に軽快に下りていくおじさんを見送って、蓋を閉め

た。
自然とため息がこぼれる。
ほとんど縁が切れたと思っていた土地に呼び出されて、その理由をほのめかされて、はぐらかされて、それで不安になるな、なんてやっぱり無茶だ。
広さはあるのに物の少ない部屋に一人。思い出が暖かい分余計に心細かった。

００３　：　招かれ人の夢

なんだろう、ふわふわする。
雲の中にいるような、マシュマロのような柔らかさに包まれて、体のどこにも力が入らない。柔らかさのなかに沈んでいくみたい。だんだん埋まっていって、そろそろ口だ。埋まっても息はできるのかな、夢の中だもんね、きっと平気に決まってる……。

「莢！」
ふわふわから強く引き起こされる感覚で目がさめた。
「……ケンちゃん？」
「飯や！」
寝こけていたようだ。
「……あー。おはよう」
「すっかり我が物顔やなぁ」
ケンは呆れたように言うけれど、すっかりも何も十年越しの勝手知ったる場所なわけで。
「とりあえず起きぃ。飯冷める」
「わかった」
手を引かれるような気分でケンを追いかけて居間に連れて行かれた。
お婆ちゃんとおじさんはもう準備万端で、待たせてしまっていたと知る。
「こいつ寝とってん」
不満丸出しで座るケンが恨めしい。
「待たせてごめんなさい」
「構わへんよ、ここすわり」
勧められておばあちゃんとケンの間に座る。座布団に正座なのがむずがゆい。

「莢ちゃんは長旅で疲れててんな。なんかええ夢でも見てたんか？」
私とケンのご飯を盛りながらおばあちゃんが聞くのに素直に頷いた。
「なんか綿菓子みたいな白いのに埋もれてく夢」
おじさんは感心したように頷いて、ケンは険しい顔をした。
「はい、これはケンの分な」
お婆ちゃんに差し出された大盛りの椀を隣のケンに回す。何でこんなに食べれるの。
「お婆ちゃん、夢になにかあるの？」
「そやねぇ……」
「あ、私ご飯それくらいでいい」
放っておくと私にもケンくらい盛られるところだった。
「はい、莢ちゃんの分」
「ありがとう」
「莢ちゃん、その夢はねぇ、この土地に歓迎された言うことや」
言葉の意味を図りかねて、ぬるい返事しかできなかった。
「御剣の家は古い信仰や風習を今も大事にしとってね、夢占いもその一個なんやよ」
「へぇ」
「詳しくはまた明日、莢ちゃんがゆっくり休んでからお話してあげような」
「わかった」
お婆ちゃん曰く、年寄りくさくて若い子の口には合わないかもしれない夕飯は、確かにちょっと精進料理っぽかったんだけど、箸はすらすら進んで、私は腹八分目なんて言葉を忘れて食べられるだけ食べてしまった。結局ご飯もおかわりして、滞在してる間ずっとこの調子だときっと太ってしまうと不安になったけど、口に出したら馬鹿にされるから心の中にしまった。

００４　：　その理由

今、私はとても緊張している。
広い和室のど真ん中で、春子お婆ちゃんと、四角いちゃぶ台を挟んで膝を突き合わせてる。お婆ちゃんがお茶のすする音だけがやけにこだましてる。
おじさんはお仕事で、ケンは鍛錬とかいうので外に出ていて、とにかくこのだだ広い家で二人っきりなのが余計に重たい。気負いすぎなのかも知れない。だけれど私の家が本家から遠かったせいで、なんだかんだいって疎遠な方だったわけで。
ああ、色々考えてたらまた緊張してきちゃった。今日の時計なんかのろくない？
湯のみが置かれた。お婆ちゃんの小さな口が動く。
「どこから話したらええんかねぇ……むつかしいねぇ」
そんなこと言われても私何も知らないから！
なんて口に出せるわけもなく。でも、こっちからなにか仕掛けないとずーっと現状維持されてしまいそう。
「ケンは修行だって、私はそれに関係あるって言ってました。どういうことですか？」
「茨ちゃんは、言い伝えや伝説って信じる？」
「あんまり……」
「じゃあ、御剣のお家が古い家柄なのは知っとるね？」
頷く。本家だとか分家だとか言うことを気にするくらいにはそうだ。私は傍系でただの一般人だけど、ケンはたしか本家の長男だったはずだ。
「家の本筋は古いしきたりなんかを大切にしとってね」
お婆ちゃんにつられて湯のみに口をつける。いつの間にか冷めてた。
「しきたりの一番大事なんはイギョウの類を追い払うことなんよ」

「イギョウ？」
「異なる形と書いて異形や。妖怪みたいなんやと思ってくれていい」
「それを追い払うの？」
躊躇いなく頷くお婆ちゃんを信じられない気持ちで見た。
「お互い干渉のしすぎはいかんからね。人間側が向こう側のことを忘れかけてるのに向こうは覚えているから構ってほしいのがよく来よる」
「ちょっと待って、ついていけない」
「信じられへんか？」
「いきなり言われても……無理だよ」
「そやね、いきなり全部言うても混乱しよるわな。今日はこのへんにしとこ。また落ち着いたら私にでも健司にでも聞けばよろしい」
呆然とする私をおいて、お婆ちゃんは部屋を出て行った。
何が困るって、お婆ちゃんが至って本気だったってことだ。
昨日の、迎えに来てくれた時にケンが言ってた修行というのも多分妖怪を倒すためのものなんだろう。
だまされてる感じはしない。ただ、突拍子もなくてとてもついていけなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2013f/

一振りの剣

2010年10月10日05時26分発行